

中津市観光振興計画

第2次 観光のすゝめ



中津市観光振興計画 第2次『な活』観光のすゝめ

目次

1 中津市観光振興計画の基本事項

- (1) 策定の目的……………P3
- (2) 計画の位置付け……………P4
- (3) 計画の期間……………P4
- (4) 中津市観光振興計画『な活』観光のすゝめ(平成30年～令和3年度)の総括…P4

2 観光の現状と課題

- (1) 市の概要……………P9
- (2) 本市の観光振興の現状……………P11
- (3) 本市の観光振興における課題……………P12

3 基本方針と主要政策の展開

基本方針……………p14

主要施策1

マーケティングに基づく国内外に向けた情報発信や売り込みの工夫と強化……………P15

主要施策2 山国川上下流域一体となった観光振興……………P16

主要政策3 「不滅の福澤プロジェクト」の推進……………P20

主要施策4 受け入れ体制の構築……………P20

主要施策5 (一社)中津耶馬溪観光協会の機能強化への支援……………P22

4 本計画の目標……………P23

1 中津市観光振興計画の基本事項

(1) 策定の目的

「人口減少・少子高齢化」が進行する我が国において、観光業は活力ある地域社会の実現を図るための総合産業として期待されるようになってきました。そうした中、平成19(2007)年1月に「観光立国推進基本法」が施行され、同年6月には「観光立国推進基本計画」が閣議決定されました。現在、観光立国の実現に取り組む体制づくりのため、平成20(2008)年10月、国土交通省に「観光庁」が設置され、国を挙げて観光振興に取り組んでいます。

しかしながら国内外で大流行した新型コロナウイルスは収束の見通しが立たない状況が続いています。中津市においても新型コロナウイルス感染拡大の影響で令和2(2020)年は観光入込客数(※1)・延べ宿泊者数(※2)共に前年比約3割減少し、観光関連事業者に多大な影響を与えています。近年、中津市を訪れる外国人旅行者は急速に増加していましたが、国際的な往来が非常に厳しい状況となり、外国人宿泊者数は前年比7割以上の大幅な減少となりました。また新型コロナウイルスの感染拡大下により、旅行ニーズが変化し、旅の少人数化やアウトドア志向がさらに強まると共にワーケーション(※3)、ブレッジャー(※4)などの「新たな旅のスタイル」が推奨されています。

新型コロナウイルス収束後を見据え、旅行者に選ばれる観光地となるよう「中津市観光振興計画第2次『な活』観光のすゝめ」を策定します。計画遂行の留意点として PDCA サイクル(※5)による計画の見直しを随時行い、常に市民や観光関連事業者のニーズに沿った実効性のある計画となるよう留意します。

観光振興によるまちづくりは、人やモノ、情報の交流を盛んにするとともに、多様な観光資源が持つ個々の価値を磨くことで各地域の持つ特性がさらに活かされると考えられます。さらには、地域間交流・連携による消費の増加、新たな雇用創出による第1次、第2次、第3次産業の振興にもつながります。こうした総合型産業である観光の振興を図るために、第1次観光振興計画(2018～2021年度)に引き続き、第2次観光振興計画を策定するものです。

(※1)観光入込客数:対象年の1～12月の期間、中津市内の各観光地を訪れた観光客の延人数。

(※2)延べ宿泊者数:対象年の1～12月の期間、中津市内の宿泊事業者に宿泊した延人数。

(※3)ワーケーション:ワーク(仕事)とバケーション(休暇)を組み合わせた造語。テレワークなどを活用し、リゾート地や温泉地、国立公園など、普段の職場とは異なる場所で余暇を楽しむつつ仕事を行うこと。

(※4)ブレッジャー:出張先などで滞在を延長するなどして余暇を楽しむ

(※5)PDCA サイクル:Plan(計画)→ Do(実行)→ Check(評価)→ Act(改善)の手順で事業を見直しながら、改善する手法。

(2)計画の位置付け

本計画は、本市の最上位計画となる第五次中津市総合計画(以下、総合計画)「なかつ安心・元気・未来プラン2017」(平成29年3月策定)に基づく、観光分野の基本計画として位置付けます。策定にあたっては、国の観光立国に向けた取り組みや大分県の「日本一のおんせん県おおいたツーリズム戦略」、本市の諸計画との整合性を図ります。

(3)計画の期間

本計画は令和4(2022)年度から令和8(2026)年度の5年間を計画期間とします。

(4)中津市観光振興計画(平成30年度～令和3年度)の総括

<平成30年>

- ・金吉地区山地崩壊災害発生
- ・「第33回国民文化祭・おおいた2018」「第18回全国障害者芸術・文化祭おおいた大会」開催

平成30(2018)年には、金吉地区山地崩壊災害が発生し、旧下毛地域で宿泊予約の取り消しや来訪者の減少などの影響が出ました。風評被害対応として、福岡市や北九州を中心とする都市部でのイベントやPRを行い、旧下毛地域で利用できるお買い物券を発行し、観光振興につなげました。また同年秋に「第33回国民文化祭・おおいた2018」「第18回全国障害者芸術・文化祭おおいた大会」が県内で開催されたことにより、前年比約6%増の観光入込客数を記録するなど県内外から多くの観光客が訪れました。



<令和元年>

・「ラグビーワールドカップ2019日本大会」開催

令和元(2019)年には大分市内で「ラグビーワールドカップ2019日本大会」が5試合開催され、開催地である大分市と連携したPRを行った結果、市内に宿泊した外国人観光客は8,000人を突破しました。また訪日外国人旅行客の増加に対応するため、「観光サイン計画」に沿って城下町エリアやメイプル耶馬サイクリングロード沿線上の観光看板の多言語化(英語)表記を行うと共に、多言語パンフレット(英語、中国語、韓国語)を発行しました。また中津耶馬溪観光協会のホームページにも海外現地目線を取り入れた多言語表記(英語・中国語)を加え、リニューアルしました。特にラグビーワールドカップを機会に訪日した外国人観光客をメインターゲットとして質の高いおもてなしを提供し、再訪につなげるため、地域通訳案内士制度(英語)を導入し、本制度を活用した旅行商品を発売し、26名の利用がありました。



<令和2年>

・マイクロツーリズムを基本とした新型コロナウイルス対策事業を実施

令和2(2020)年は新型コロナウイルスが世界中で猛威を振るいました。緊急事態宣言が発令され、県境を跨いだ移動が制限されるなか、マイクロツーリズム(※6)を基本とした①ちよい旅なかつキャンペーン②2020中津耶馬溪食の周遊キャンペーン③なかつ発！福旅キャンペーンの3事業を柱とした新型コロナウイルス対策事業を展開しました。またオンラインツアーなどの新しい取り組みも導入し、観光を取り巻く環境の変化に対応した年でもありました。

(※6)マイクロツーリズム:自宅から約1時間の移動圏内で観光する近距離旅行。

<令和3年>

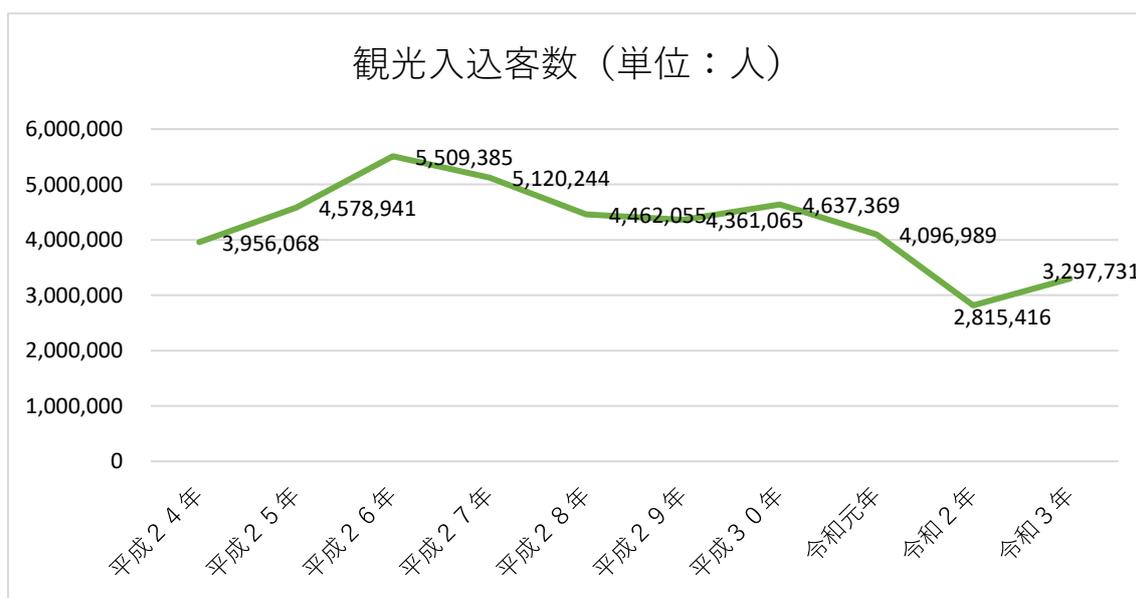
・「2021 日本遺産やばけい遊覧博覧会(やばはく)」開催

令和3(2021)年に日本遺産(※7)「やばけい遊覧～大地に描いた山水絵巻の道をゆく～」をテーマに「2021 日本遺産やばけい遊覧博覧会(やばはく)」を春と秋に開催し、歴史や文化、自然を題材とした 8 のストーリーを体験できるプログラムを企画・募集・運営し、400名を超える参加者に楽しんでいただきました。また 100 名を超える参加があった「やばけいゆ～らんサイクルロゲイニング」などのイベントを通じてメイプル耶馬サイクリングロードを生かした山国川上下流一体となった観光振興に取り組みました。

(※7)日本遺産:地域の歴史的魅力や特色を通じて、日本の文化・伝統を語るストーリーを認定する文化庁の取り組み。

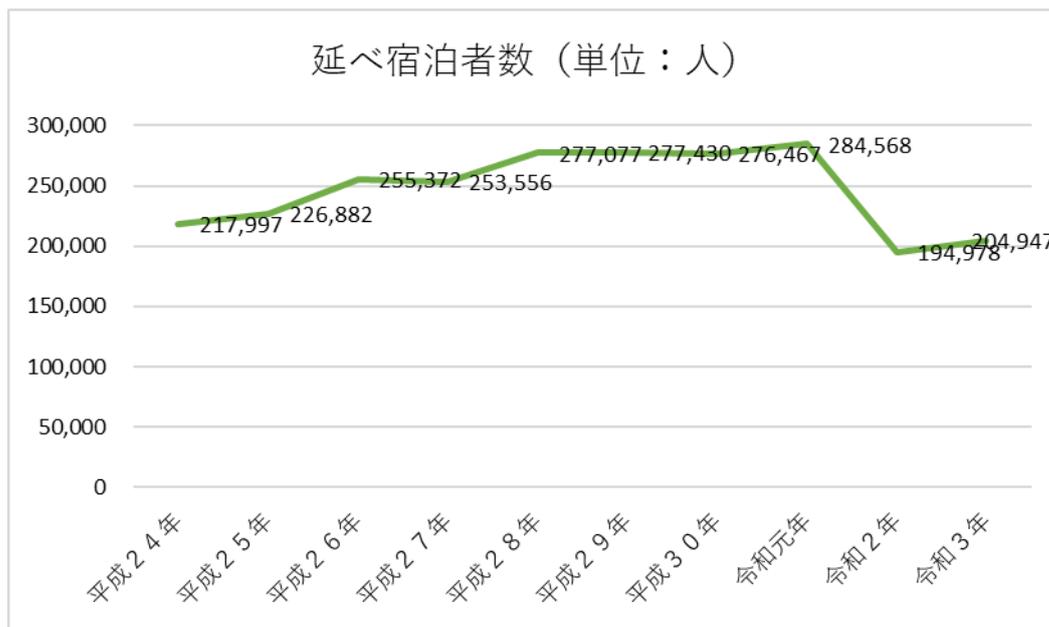
<観光入込客数>

本市の観光入込客数については、平成26(2014)年は大河ドラマ「軍師官兵衛」の影響で特に中津城などの旧中津市への観光客が増加し、観光動態調査を開始して以来、最多の約550万人となりました。その後は官兵衛ブームの終息や平成29(2017)年7月の九州北部豪雨などの影響で減少し、平成29(2017)年は約436万人まで落ち込みました。平成30(2018)年は4月に発生した金吉地区山地崩壊災害が発生したものの、迅速な復興対策が功を成し、約464万人にまで回復しました。令和元(2019)年には日韓関係の悪化から、韓国人団体旅行客が激減し、約410万人まで落ち込みました。続く令和2(2020)年には新型コロナウイルスの感染拡大の影響で300万人を割り、約282万人と大幅に減少しました。令和3(2021)年には、新型コロナワクチン接種の進展などで前年比17%増の約329万人まで回復しました。



<延べ宿泊者数>

本市の延べ宿泊者数は、平成30(2018)年に減少したものの、令和元(2019)年まで増加傾向が続き、初めて28万人を超えました。宿泊者の約9割は旧中津市に宿泊しており、JR中津駅周辺のビジネスホテルが大きな割合を占めています。観光客のほか自動車関連企業などのビジネス宿泊客も堅調であったことも大きな要因といえます。特に外国人延べ宿泊客は、高い伸びを示し、ラグビーワールドカップが開催された令和元(2019)年には8,000人を超えました。平成29(2017)年の九州北部豪雨や平成30(2018)年金吉地区山地崩壊災害、続く令和元(2019)年の日韓関係の悪化から延べ宿泊者数の減少が懸念されましたが、効果的な対策事業を展開し数字を積み上げてきました。しかしながら、新型コロナウイルスの影響で、令和2(2020)年は、前年比約3割減で20万人を割り込み、約19万5千人となりました。令和3(2021)年には、観光入込客数と同様に新型コロナワクチン接種の進展などで、前年比5%増の約20万4千人まで回復しました。



<全体総括>

「中津市観光振興計画『な活』観光のすゝめ」の策定期間(平成30年度～令和3年度)では、金吉地区山地崩壊災害や日韓関係悪化などで観光客数に影響が出ましたが、世界的なイベント「ラグビーワールドカップ2019日本大会」に向けた取り組みで訪日外国人旅行客の受入体制整備が進みました。

またサイクリングイベントを開催することで観光スポット間をつなぐ山国川上下流域一体となった観光振興が進展すると共に、日本遺産を活かした魅力あふれる体験プログラムが開催されました。これらの取り組みは、アフターコロナにつながる取り組みでもあります。

<目標の達成度 >

総合計画に掲げた令和 8(2026)年目標に対して、直近の令和3年実績は観光入込客数61.8%、延べ宿泊者数73.1%の達成率となっています。

指標名	目標（令和8年）	令和3年実績	達成率
観光入込客数	5,340,000人	3,297,731人	61.8%
延べ宿泊者数	280,000人	204,947人	73.2%

○これまでの歩み

これまでの実績	観光入込客数	延べ宿泊者数	うち外国人	主な出来事
平成24年	3,956,068人	217,997人	データなし	九州北部豪雨
平成25年	4,578,941人	226,882人	データなし	
平成26年	5,509,385人	255,372人	データなし	大河ドラマ軍師官兵衛放送
平成27年	5,120,244人	253,556人	データなし	おんせん県おおいたDC
平成28年	4,462,055人	277,077人	3,400人	熊本地震
平成29年	4,361,065人	277,430人	2,892人	九州北部豪雨
平成30年	4,637,369人	276,467人	4,097人	金吉山地崩壊、国民文化祭・全国障害者芸術・文化祭おおいた大会
令和元年	4,096,989人	284,568人	8,063人	日韓関係悪化、ラグビーワールドカップ
令和2年	2,815,416人	194,978人	2,331人	新型コロナウイルス感染拡大
令和3年	3,297,731人	204,947人	1,203人	新型コロナウイルス感染拡大

2 観光の現状と課題

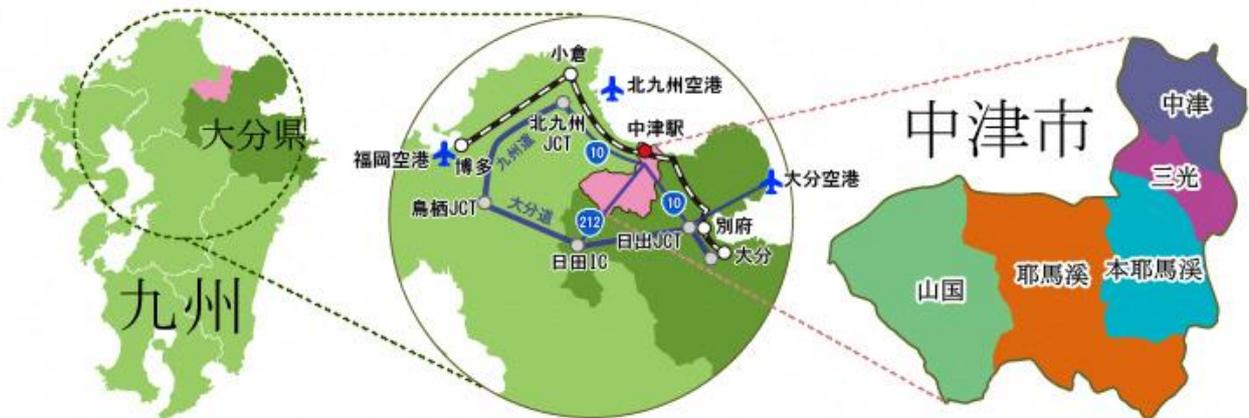
(1) 市の概要

中津市は、平成17(2005)年3月1日に旧中津市と旧下毛郡3町1村が合併し、面積は491.53km²となりました。市域の約80%は山林原野が占め、山国川下流の平野部にまとまった農地が開け、中津地域を中核としています。北部は狭く南部は西方に大きく張り出した形状を示し西側に英彦山がそびえ、地域を貫流する山国川の分水嶺となっています。大分市まで82km、北九州市まで52kmの距離にある県北の中核都市であり、観光における主要な交通手段としては、JR日豊本線および東九州自動車道、国道10号、国道213号が東西に走り、また国道212号が中津市を起点として南に延びて市域を縦断しています。さらに、今後は地域高規格道路「中津日田道路」の整備に伴い、中津～日田間の観光ルートに変化が生じると予想されます。

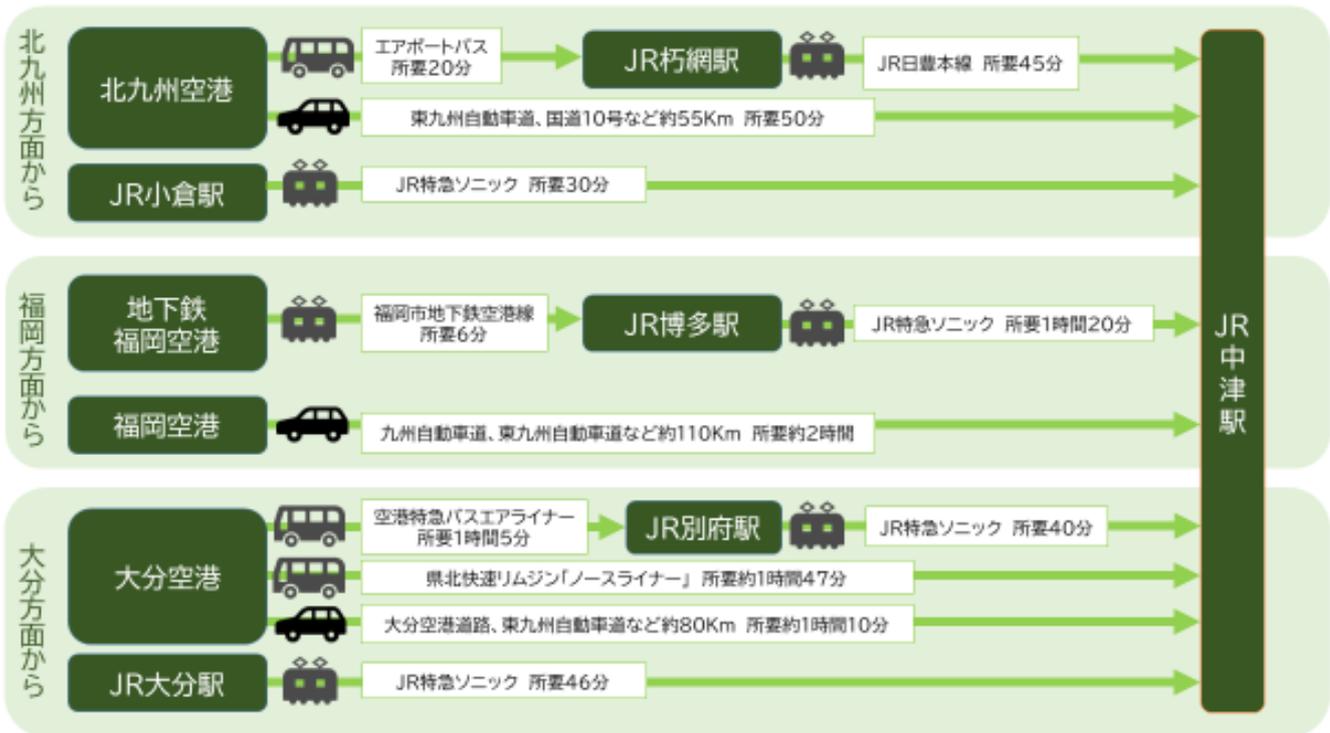
山国川は、その流域面積540km²(福岡県側も含む)、幹線流路延長は56kmで、平地部の少ない扇形状の急流河川です。上中流部は浸食地形による溪谷が多く、山地部が大部分を占め、その地質構造から形作られた自然の景観は、競秀峰・擲筆峰・一目八景・猿飛千壺峡などの景勝地を誇る「耶馬溪(国指定名勝)」の名のもと、多くの観光客が訪れています。また、この一帯は、昭和25(1950)年に指定された耶馬日田英彦山国定公園の区域に含まれており、下流部は、山国川を県境として、左岸部は福岡県、右岸部は大分県となって段丘地形中津平野を形成しています。

令和2(2020)年10月1日の国勢調査(総務省統計局による人口等基本集計値)による本市の総人口は82,863人、総世帯数は37,571世帯で、これを前回(平成27年)と比較すると、人口は1,102人の減少(△1.3%)、世帯数は1,786世帯の増加(5.0%)となっています。

中津市の位置図



中津市のアクセス状況



(2)本市の観光振興の現状

本市は、城下町と耶馬溪に大別して2つの観光地を有しています。城下町は福澤諭吉の育った故郷である福澤諭吉旧居・福澤記念館や黒田官兵衛が築城を開始した中津城など様々な情緒あふれる観光スポットが点在し、令和元(2019)年には中津市歴史博物館が新たにオープンしました。多くの偉人を輩出した城下町の観光は、現存する歴史的価値ある建造物や文化、そしてこれらの観光地点間が比較的近く、まちあるきできるアクセスの良さが魅力となっています。一方、紅葉の名所と知られる耶馬溪は一目八景や溪石園、猿飛千壺狭などの自然景観が魅力の観光地を有し、日本遺産をテーマに体験プログラムが開催されています。また、旧耶馬溪鉄道跡を利用したメイプル耶馬サイクリングロードは、新型コロナウイルス感染拡大下でも楽しめるサイクリングスポットとして人気を博しています。さらに旧中津市内から耶馬溪エリアを繋ぐ中津日田道路の整備に伴い、八面山に「天空の道展望デッキ」と「山頂トイレ」を新設し、登山を楽しむ観光客の利用が今後も増加すると予想されます。しかしながら下毛地域は近年急速に過疎化が進んでいるのに加えて、耶馬溪サイクリングターミナルの老朽化が課題となっています。平成30(2018)年から市内で農家民泊(※8)が開始されたものの、事業者数が少ないため、修学旅行などの団体客の受け入れが難しいのが現状です。

交通の面では、福岡空港や北九州空港、大分空港の近隣空港からのアクセスに恵まれ、東九州自動車道の4車線化の整備も進められています。さらに中津日田道路の順次開通に伴い、都市圏から観光客増加が見込めると共に、中津港から耶馬溪までのアクセスが改善され、飛鳥Ⅱやにつぼん丸などのクルーズ船の乗客が市内日帰り旅行を楽しんでいただける機会が増えると想定されます。しかしながら2次交通では、JR中津駅から耶馬溪方面への公共交通機関が不足している現状です。またメイプル耶馬サイクリングロード沿いにあるレンタサイクル貸出し拠点は、各々運営主体が異なっているため、相互乗り捨てに制限があり、今後の連携強化による利便性の向上を図る必要があります。

これまで台湾、香港、韓国などの東アジアを中心に多くの訪日外国人客が本市を来訪していました。しかし世界的な新型コロナウイルス流行の影響で、訪日外国人の誘客は難しくなりましたが、台湾台中市との交流を継続して行っており、新型コロナウイルス収束後には観光客の来訪が期待できます。

本市を訪れる観光客は、日帰り客の割合が多く、通過型観光になっているという現状があります。

(※8)農家民泊:農山漁村地域に宿泊し、豊かな地域資源を活用した食事や体験などを楽しむ滞在型旅行。

(3)本市観光振興における課題

中津市の観光を取り巻く現状をSWOT(※9)分析により整理します。

SWOT分析	プラス	マイナス
内部環境	<p>強み (Strength)</p> <ul style="list-style-type: none"> ●福澤諭吉先生の出身地 福澤諭吉旧居・福澤記念館や新中津市学校、慶應義塾との連携 ●歴史ある城下町 黒田官兵衛が築城開始した中津城や中津市歴史博物館、蘭学など学問の栄えた町 ●耶馬溪地域のブランド力 全国的な知名度の「紅葉」や「奇岩奇峰」の観光地で日本新三景にも選ばれた耶馬溪 ●日本遺産「やばけい遊覧～大地に描いた山水絵巻の道をゆく～」 玖珠町と連携した体験プログラム「日本遺産やばけい遊覧博覧会」の開催 ●メイプル耶馬サイクリングロード 旧耶馬溪鉄道跡を利用した自然豊かなサイクリングロード ●グルメ 中津からあげ、はも料理、ひがた美人(養殖カキ) ●中津港 クルーズ船「飛鳥II」「にっぽん丸」も寄港する重要港湾 ●自動車産業の集積したまち ダイハツ九州などの工場見学 ●自治体間交流 台湾台中市とのサイクルツーリズム及び観光友好交流、三津同盟、太宰府市との交流 	<p>弱み (Weakness)</p> <ul style="list-style-type: none"> ●観光客の大部分が通過型観光 ・滞在時間の短い日帰り観光客の割合が多いため、観光客数の割に観光消費額が伸び悩む ・農家民泊事業者の世帯数が少ない ●体験プログラムのヒット商品 地域の魅力を活かし、観光消費額を底上げするような体験プログラムのヒット商品が造成・販売できていない ●地域の持つポテンシャルを活かしきれていない 魅力ある数々の観光地や観光素材を有しながらも、地域の持つポテンシャルを十分に発揮できていない
外部環境	<p>機会 (Opportunity)</p> <ul style="list-style-type: none"> ●旅のスタイルの変化 ・団体から少人数化へ ・登山などのアウトドアブーム ●東九州自動車道の全線開通 広島・山口・福岡・宮崎からのアクセス時間短縮 ●中津日田道路の順次開通 中津港から日田市に至る約55kmの地域高規格道路(開通予定) ●空港、鉄道駅からのアクセスが良好 ・福岡空港、北九州空港、宇宙港に選ばれた大分空港から1時間弱～2時間以内 ・中津駅は主要駅(大分駅-博多駅、小倉駅)区間の特急列車が全て停車 	<p>脅威 (Threat)</p> <ul style="list-style-type: none"> ●新型コロナウイルス感染拡大 新型コロナウイルス感染拡大による移動制限 ●自然災害(地震、水害など) 被災+風評被害 ●少子高齢化社会 ・観光客の絶対数の減少 ・受け入れ地域の担い手不足

(※9)SWOT分析:「強み(Strength)」、「弱み(Weakness)」、「機会(Opportunity)」、「脅威(Threat)」の4つのカテゴリーを視点として、現状分析を行うフレームワークです。

SWOT分析により『内部環境』の『弱み』に該当する中津の観光振興における課題を抽出します。

乗り越えるべき課題

課題	重点指針
観光客の大部分が通過型観光	通過型観光から滞在型観光へ
体験プログラムのヒット商品	ここでしか出来ない体験プログラム
観光の強みを数多く有しながら、ポテンシャルを活かしきれていない	地域と協働した観光地域づくり

3 基本方針と主要施策の展開

基本方針

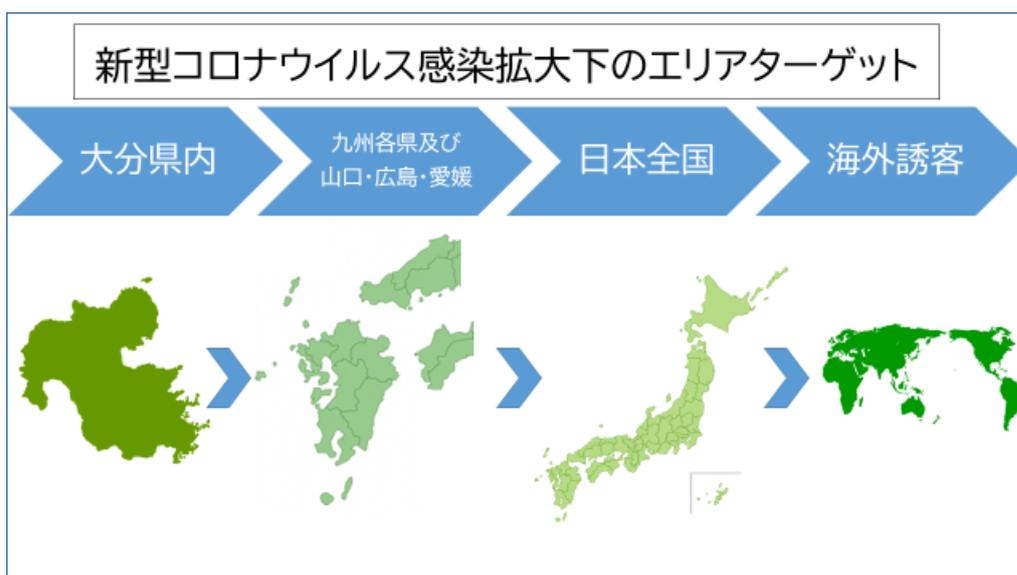
新型コロナウイルス感染拡大の収束を見据え、ターゲットを①県内他市町村(マイクロツーリズム)、②九州各県及び山口・広島・愛媛の隣県域、③国内全域、④海外誘客と4つの段階に順次取り組み、観光誘客を図ります。観光消費額の増を図るため、アンケート調査等から得られたデータ分析に基づき、ターゲットに合わせた効果的な情報発信や体験プログラムの提供を通じて、観光客の滞在時間延長を図ります。マーケティングを通じて、地域が主体となった体験型観光を推進します。

また、「山国川上下流域一体となった観光振興」のシンボリックな観光素材であるメイプル耶馬サイクリングロードを核として、点在する観光スポットや地域にある素材を繋ぎ合わせ、中津・耶馬溪観光の更なる魅力向上を図ります。

さらに、観光協会による体験プログラムの販売に加え、観光素材磨きを行い、新しい観光ニーズに応じた事業展開ができるよう、観光協会の機能強化を行います。

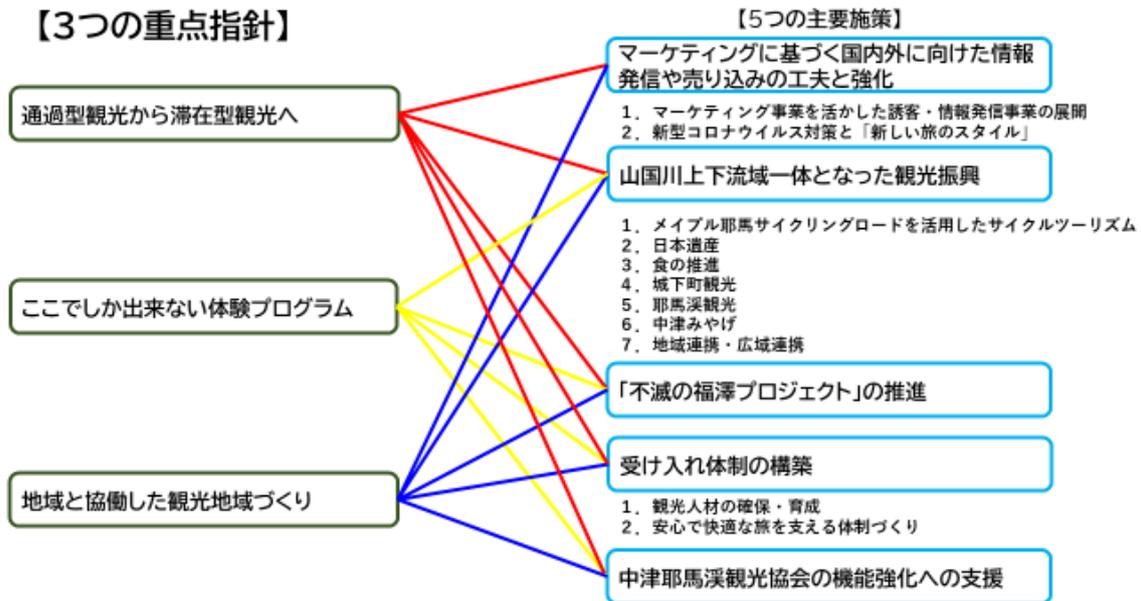
今後の中津日田道路などの整備進捗に伴い、観光地への交通アクセスの変化に対応するため、主要観光地へ戦略的に誘導する道路標識などの整備を進め、観光客の周遊性向上を図ると共に、市内にある道の駅などでは観光案内拠点としての機能拡充を進めるほか、観光ガイドの接遇力、広域対応力を強化します。あわせて、誘客・周遊の効果を高めるため、近隣自治体との広域連携を強化します。

また、地域磨きの一環として、令和6年に壹万円札の肖像から交代する郷土の偉人福澤諭吉先生の功績を末永く後世に伝えていく「不滅の福澤プロジェクト」に、官民協働により継続的に取り組みます。



主要施策の展開

基本方針のもと3つの重点指針を柱として、5つの主要施策を展開します。



主要施策1 マーケティングに基づく国内外に向けた情報発信や売り込

みの工夫と強化

1. マーケティング事業を活かした誘客・情報発信事業の展開

効果的な誘客や情報発信を行うためには、観光客の情報を収集・分析し、ターゲットに応じたマーケティングを行う必要があります。観光客に実施するアンケート調査やデジタルマーケティング調査等を実施し、得られたデータに基づいた事業を実施します。各アンケート調査等の結果は行政のみならず、観光事業者などの関係団体と情報共有することが重要です。マーケティング事業では、観光客の年齢、性別、出発地などの属性情報や来訪目的、情報取得手段などを分析し、誘客・情報発信などの各事業に活用することで通過型観光から滞在観光へと地域が潤う仕組みづくりを行います。

また誘客・情報発信事業は、ターゲットとなる観光客に応じた誘客・情報発信を行い、事業毎の点検を実施、事業の改善点をこれから予定されている事業にフィードバックします。各事業の実施見直しを行いながら、費用対効果の高い事業を実施します。特に事業効果が見えやすいインターネットを活用した情報発信事業に力を入れて取り組むと共に、市が運用するくろかんくん Facebook や Instagram を活用して、中津市のファンを広げていきます。

2. 新型コロナウイルス対策と「新しい旅のスタイル」

国内の感染状況を見ながら、当面はマイクロツーリズムが主流になると考えられるため、県内各市町村、次に九州各県及び山口・広島・愛媛の隣県域、そして国内全域、最終的に海外の4つの段階とエリアターゲットに分け、順次取り組みます。新型コロナウイルスの影響で生活様式が変化したことにより、生まれた旅行需要「新たな旅のスタイル」に対応した旅行を提案することで、新しい観光ニーズに沿った観光事業を展開していきます。

主要施策2 山国川上下流域一体となった観光振興

1. メイプル耶馬サイクリングロードを活用したサイクルツーリズム

平成28(2016)年10月、行政・関係団体・サイクリング関係者・市民などから構成されるメイプル耶馬サイクリングロード活性化会議から中津市長にサイクリングロード活性化に関しての提言がなされました。この提言を基に策定した活性化計画を基本に、計画に則した事業を進めていきます。

まず、安全で快適なサイクリング環境づくりとして、サイクリングロードの管理者である大分県と連携し、危険箇所のメンテナンス・改善、休憩施設の設置・整備をすすめ、安全、快適なロード整備を行います。

また、旧耶馬溪鉄道跡という特性を活かしつつ、景観に合わせた看板の設置などサイクリストに快適な旅を提供できるよう努めます。

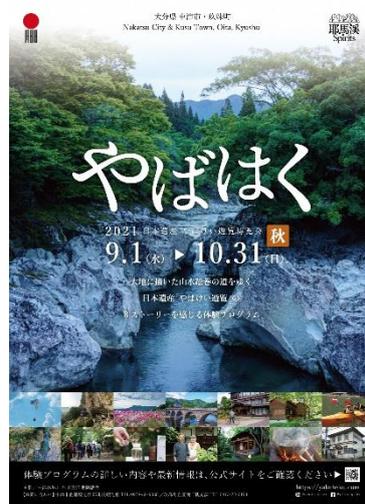
次に、地域をつなぐサイクルツーリズムとなるよう、サイクリングロード沿線だけでなく、サイクリングロード外のコースを含んだ複数のモデルコースをPRし、周辺施設との連携を図ります。このほか、サイクリングガイドの育成やサイクリングイベント・ツアーを企画し、国内外からの誘客を図ります。

また、レンタサイクル拠点の機能充実や各拠点間との連携を見直し、レンタサイクル利便性の向上を図ります。



2. 日本遺産

平成29(2017)年4月28日には、中津市・玖珠町にまたがる広大な景勝地「耶馬溪」の歴史や文化を語るストーリー「やばけい遊覧～大地に描いた山水絵巻の道をゆく～」が日本遺産に認定され、耶馬溪の認知度を全国的に広める絶好の機会となりました。この好機を活かすためにも、中津市・玖珠町が連携して観光振興に取り組むことが重要で、お互いの観光資源をつなぎ、テーマに沿った情報発信を国内外に対して積極的に行うなどの知名度アップを図っていきます。令和3(2021)年の春・秋には「やばけい遊覧」をストーリーとした体験プログラム「やばはく」が開催され、同年7月には構成文化財が追加されました。今後も日本遺産の文化財を次世代につなぎ、活用するための取組みをすすめます。



3. 食の推進

旅先での地域固有のグルメは楽しみのひとつです。これまで「はも料理」や「中津からあげ」を代表的なグルメとしてPR・情報発信を行ってきました。市内飲食店と連携したスタンプラリーイベント実施やパンフレットの作成などにより、認知度向上や定着を図ってきました。特に中津からあげでは、“からあげの聖地中津”として、聖地中津からあげの会の活動や日本全国で開催されている「からあげフェスティバル」の実施もあり、全国区の知名度となりました。令和元(2019)年には、「第12回からあげフェスティバル」で市内外18のからあげ専門店が参加し、計約1670キロのからあげを揚げてギネス世界記録を樹立しました。全国的に広がった「中津からあげ」のブランド強化・保護のため中津商工会議所が「中津からあげ」を商標登録しました。今後は「はも料理」や「中津からあげ」の更なるPRによる定着化を進めるとともに、首都圏や香港などに販路を持つ養殖カキ「ひがた美人」や、地域として取り組んでいる耶馬溪そばなどのプロモーションを行っていきます。これらのグルメを訴求することによって、通過型観光を未然に防ぎ、市内飲食店の利用を促進していきます。



4. 城下町観光

黒田官兵衛が築城を開始した中津城を中心とした城下町観光は、NHK大河ドラマ「軍師官兵衛」の放送が決定してから毎年多くの観光客が訪れる重要な観光エリアとなっています。また、この地域は福澤諭吉先生をはじめとして、多くの偉人を輩出しており、福澤諭吉旧居・福澤記念館や村上医家史料館、大江医家史料館などの観光施設が点在し、各施設間のアクセスが徒歩圏内という好立地となっています。令和元(2019)年11月には中津市歴史博物館がオープンし、城下町の観光のさらなる魅力となっています。ほかにも、歴史ある寺院が立ち並ぶ寺町、城下町の風情を持った町屋や武家屋敷のまちなみが残る諸町など、歴史・文化のまちとして魅力ある観光素材を数多く有しています。令和3(2021)年8月には福澤旧居レストハウスに「諭吉コルリ」がオープンし、お食事処としての機能の他に観光案内や無料休憩所、お土産販売を行っております。これらの城下町観光の素材を効果的に活用するために、「まちあるき」、「歴史好き」、「教育旅行」などニーズに合わせた観光モデルルートの設定やPRを進めるとともに、地域と協力したイベントの実施などにより城下町観光を推進します。



5. 耶馬溪観光

中津日田道路が順次開通することにより交通アクセスが改善し、福岡県などの北部九州や広島県や山口県などからの観光客増加が見込めます。耶馬溪には「猿飛千壺狭」や「溪石園」、「メイプル耶馬サイクリングロード」、「八面山」など数多くのポテンシャルを秘めた観光素材が点在しています。さらなる観光PRを行うと共に、必要な環境整備を行っていきます。

また旧下毛地域に魅力ある宿泊施設が不足していることが通過型観光の一因ともいえます。解決策の一つとして、農作業体験などの体験型プログラムと宿泊が一体となった農家民泊を推進することで、過疎化が進む耶馬溪に宿泊客と受け入れ農家の間に交流も生まれ、関係人口の増加や地域活性化につながります。農家民泊を推進するために、制度説明会の開催などによる周知をはじめとして、農家民泊運営の支援を行います。



6. 中津みやげ

中津城下町の伝統を活かして、「けんちん」や「ういろう」、「中津ぼうろ」等の和菓子や中津藩の武士が内職として竹と紙を使って制作していた和傘などの九州でも珍しい地域ならではの土産が数多くあります。その他にも本耶馬溪産のそばの実を使って手軽に十割そばが打てるユニークなお土産なども販売されています。これらの中津を印象づけるお土産は再訪意欲を刺激する効果が期待でき、観光消費額を伸ばす重要な要素だと言えます。ターゲットに応じた効果的な情報発信を行うことで、旅の楽しみであるお土産購入に繋げ、お土産を介した口コミでのさらなる観光PRを図っていきます。

7. 地域連携・広域連携

中津市の観光振興を効果的に実施する観点から、地域連携や広域連携を活用した取り組みを進めていく必要があります。

地域連携の取り組みとして、中津市・宇佐市・豊後高田市、福岡県豊前市・築上町・上毛町・吉富町で「九州周防灘地域定住自立圏広域観光振興協議会」を運営し、それぞれの地域の持つ資源を活かし、圏域の観光振興および圏域内外の住民との交流を促進していきます。

広域連携の取り組みとして、別府市から中津市までの6市1町1村からなる登録DMO(※10)「一般社団法人 豊の国千年ロマン観光圏」は、地域一体となった情報発信・プロモーション、受入環境の整備、観光資源の磨き上げなどを推進しています。

また大分県や「公益社団法人 ツーリズムおおいた」と連携した事業展開も行っています。特に大分県の県外事務所である東京事務所、大阪事務所、福岡事務所とは、各都市圏の情報発信拠点として強みを活かし、連携した観光プロモーションに取り組みを行います。

上記連携以外にも友好協定を締結している福岡県太宰府市との連携や大分県北部振興局と大分県北部3市(中津市、宇佐市、豊後高田市)で取り組む「おおいたノースエリア連携協議会」、令和3(2021)年11月に岡山県津山市や島根県津和野町と締結した、学術や知的観光を振興する「蘭学・洋学 三津同盟」などの枠組みを活用し、関係団体と協力した観光事業を実施していきます。

(※10)登録 DMO:地域の「稼ぐ力」を引き出すとともに「観光地経営」の視点に立った観光地域づくりの舵取り役として、多様な関係者と協同しながら、明確なコンセプトに基づいた観光地域づくりを実現するための戦略を策定・実施する法人。

主要施策3 「不滅の福澤プロジェクト」の推進

昭和59(1984)年から40年にわたって“壹万円札”の肖像となった福澤諭吉先生が令和6(2024)年に渋沢栄一翁と交代になります。全国的に注目される肖像交代を新たな契機として福澤諭吉先生の功績を末永く後世に伝えていく「不滅の福澤プロジェクト」を慶應義塾や市内商工団体などと共に官民協働で実施していきます。本プロジェクトは福澤諭吉先生の故郷“中津”を全国に発信し、先生の思想を後世に伝え、グローバル時代に活躍する人材育成を行うと共に、故郷の偉人「福澤諭吉」を連綿と伝えるネットワークづくりを行うことを主な目的としています。



主要施策4 受け入れ体制の構築

1. 観光人材の確保・育成

観光産業の活性化と持続性ある地域づくりを目的として、農泊などの地域観光事業者や観光のキーパーソンとなる人材確保・育成に取り組むと共に未発掘の観光人材の掘り起こしを行っていきます。受け入れ体制の充実化として観光の最前線でおもてなしを実践している観光ガイドや交通事業者、飲食店などを対象とした研修会を開催し、来訪者に“来てよかった”“もう一度中津市に訪れたい”と思ってもらえるよう、おもてなしの質を高めていきます。また新型コロナウイルス収束後を見据えて、訪日外国人旅行者の受け入れに対応するため、令和元(2019)年に導入した地域通訳案内士制度(英語)を引き続き運用し、質の高い観光案内を提供できるよう地域通訳案内士を育成していきます。これらの事業を通じて地域活性化につながる観光人材づくりを積極的に進めていきます。

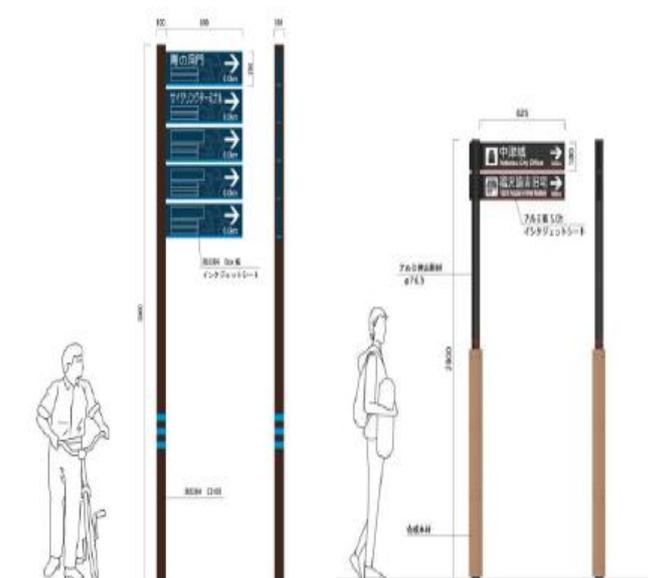


2. 安心して快適な旅を支える体制づくり

観光客に旅を満足していただくため、安心して快適な旅情報を提供することは重要です。観光案内所の質の向上やモデルコースなどを提案する観光パンフレットを製作し、ストレスフリーの旅行プランを支援します。またハード面の整備として「中津市観光サイン計画」に基づいた観光案内サイン整備をすすめます。具体的には、歩行者、自転車、自動車の三つの用途に分けて案内経路を作成し、統一的なデザインの観光案内サイン整備を図ります。その他の取り組みとして観光施設などに無料Wi-Fi環境の整備を行い、安心して快適な旅を支える体制づくりを行います。

また近隣空港からJR中津駅までシャトルバス及びJRを利用してアクセス出来ることから、中津駅から徒歩圏内の城下町周辺における観光については交通の利便性が高いといえます。しかし、中津駅から耶馬溪方面に向けては路線バスの便数が少なく、2次交通として公共交通機関を利用する観光客にとって、観光地までの移動手段が限られています。このため、既存の路線バスやタクシー、レンタカー、レンタサイクルなどの利用促進や、着地型商品(※11)の造成など、交通事業者とも連携した取り組みをすすめます。

(※11)着地型商品:旅行者を受け入れる地域で作られる体験プログラムなどの旅行商品。



主要施策5 (一社)中津耶馬溪観光協会の機能強化への支援

「一般社団法人中津耶馬溪観光協会」は市内の観光振興を目的として、誘客、情報発信などの各事業の企画立案、運営を行うと共に観光案内業務や市観光推進課などの関係機関、観光事業者、交通事業者などとの連携を行っています。

これまでの経緯を振り返ると平成28(2016)年11月、任意団体であった「中津耶馬溪観光協会」が法人化し、「一般社団法人 中津耶馬溪観光協会」となりました。平成29(2017)年に「旅行業務取扱管理者資格」を取得したことにより、着地型商品の造成・販売・催行など独自の収益事業を展開することが可能になりました。

これから中津市のもつ観光のポテンシャルを引き出すため、観光協会のさらなる組織力強化・機能拡充を図る必要があります。収益事業や会員からの会費収入による自主財源を確保し、専門人材の確保に努め、費用対効果を意識した事業展開が求められます。

また組織力強化・機能拡充の延長線上として、観光協会は、登録DMOへの移行も視野に入れた取り組みを行っています。登録DMOは、各種データの収集・分析を通じて、明確なコンセプトに基づいた戦略を策定・実施し、関係事業者と協同して地域が一体となった観光施策を展開する組織です。地域の稼ぐ力を引き出せる観光地域を形成できるよう、連携を密にし、登録DMOへの移行を検討していきます。

今後とも、観光協会が名実ともに市内の観光振興のリーダーとして観光事業を企画・推進できるよう組織運営と事業推進の両面にわたり支援を行っていきます。

4 本計画の目標

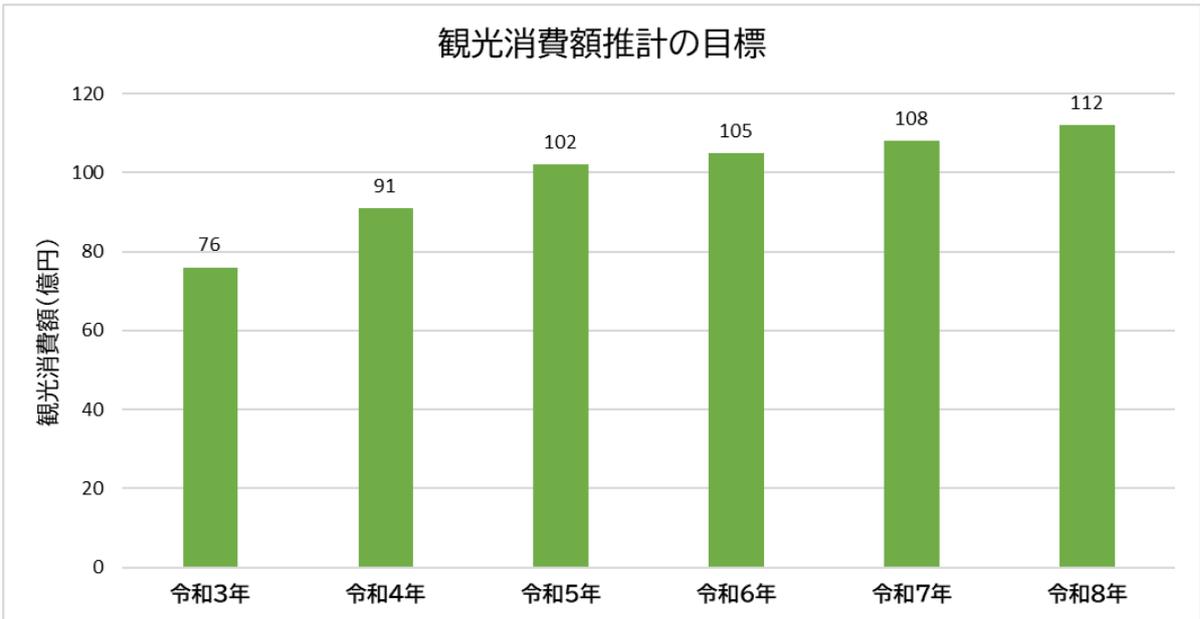
令和3(2021)年(1~12月)の観光入込客数 3,297,731 人と前年比約17%増、延べ宿泊者数は 204,947人と前年比5%増と回復傾向となりました。「中津市観光振興計画第2次『な活』観光のすゝめ」では、令和4(2022)年にコロナ前の約8~9割程度まで回復し、翌令和5(2023)年には、新型コロナウイルス感染状況が落ち着き、国内外の移動制限が解除され、コロナ前の水準に戻ると想定した目標値を掲げています。令和6(2024)年以降は、体験プログラムや市内周遊性向上によって滞在時間延長を加味し、さらなる飛躍を期待した目標とします。計画最終年の令和8(2026)年の目標は延べ観光入込客数が466万7千人、延べ宿泊者数は31万2千人、観光消費額推計(※12)は112億円と設定します。

(※12)観光消費額推計:観光入込客数、延べ宿泊者数やアンケート調査から得られたデータを基に、対象年の1~12月の観光客が市内消費した金額の推計値。

目標値	令和4年	令和5年	令和6年	令和7年	令和8年
観光入込客数	3,848,000人	4,365,000人	4,464,000人	4,565,000人	4,667,000人
延べ宿泊者数	251,000人	279,000人	290,000人	301,000人	312,000人
観光消費額推計	91億円	102億円	105億円	108億円	112億円

※本計画の令和8年目標を設定するにあたり、令和3年の現状値を確認します。

現状値	令和3年
観光入込客数	3,297,731人
延べ宿泊者数	204,947人
観光消費額推計	76億円



中津市観光振興計画
第2次『な活』観光のすゝめ

令和4年3月発行
編集・発行 中津市企画観光部観光推進課
〒871-8501 大分県中津市豊田町14番地3
TEL:0979-62-9034
FAX:0979-24-4020
Email:kankou@city.nakatsu.lg.jp
